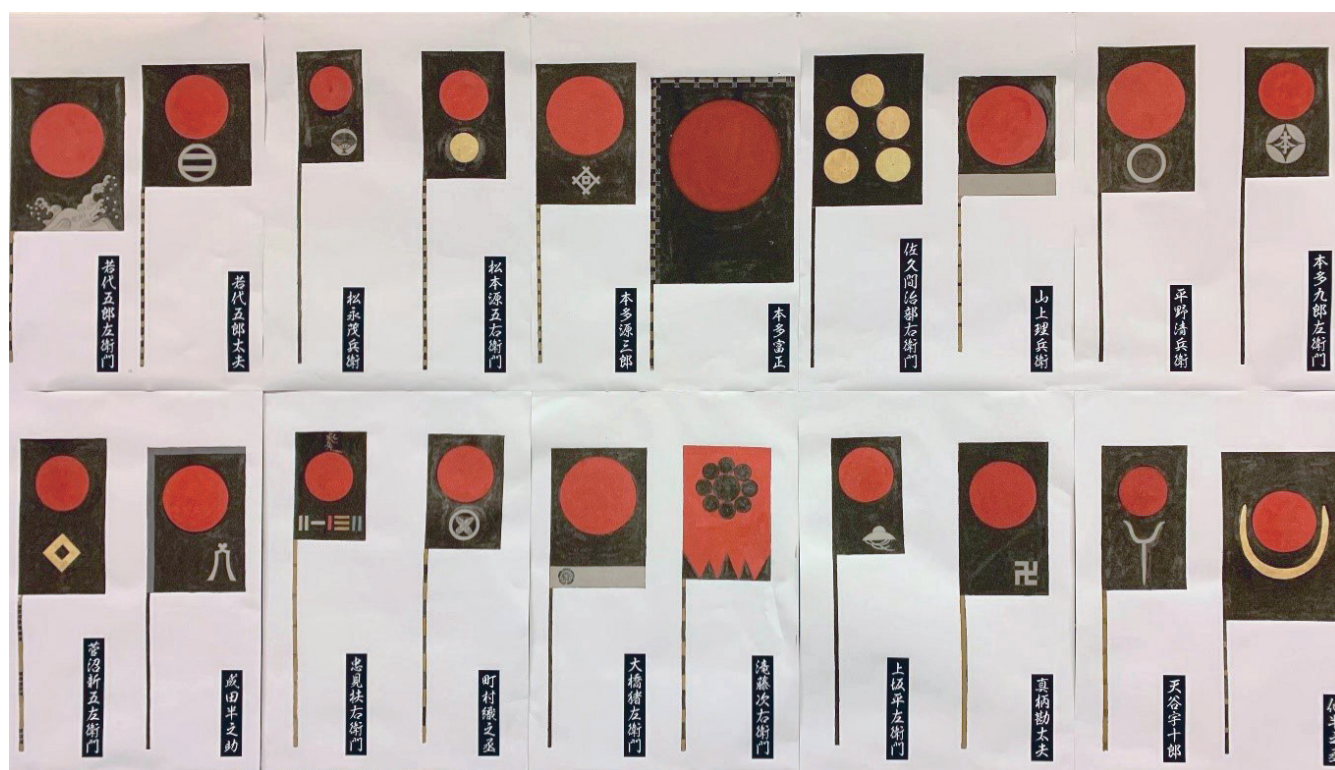


越前市中央図書館創立 100 周年記念 特別資料展



日時 …… 令和 5 年 12 月 23 日(土)、24 日(日) 午前 10 時から午後 4 時まで
会場 …… 越前市中央図書館 学習支援室

ごあいさつ

越前市中央図書館は、大正11年（1922）12月23日に開館してから本年度100周年を迎えました。山甚産業創業者の山本甚三郎氏からの図書館寄附の申し出を受け、旧武生東尋常高等小学校（現府中1丁目・越前市役所建設地）校庭の南西に、石造書庫3階・閲覧室2階建ての町立図書館が建てられたのが始まりです。

その後、昭和38年（1963）の越前岬沖地震（M6.9）により石造書庫に亀裂が入ったため、昭和41年（1966）、現幸町の越前市役所立体駐車場にあった元検察庁を改築して移転。昭和51年（1976）、老朽化のため同地に新館を建設することとなり、工事中は現・府中2丁目にあった元法務局に移転、昭和52年（1977）に幸町に新しい武生市立図書館が開館しました。それから約30年後、図書館の老朽化・狭隘化が深刻となったことから、平成18年（2006）、高瀬2丁目に越前市中央図書館として新築移転し、現在に至ります。

当図書館は、100年前の開館当初から、郷土ゆかりの多くの方々に貴重な蔵書や古文書などを多数ご寄贈いただき、それらがベースとなり大きくなっていった、いわば地域の方々に育てていただいた図書館といえます。今回の展示では、それら貴重図書の一部や図書館の歴史を物語る様々な資料をご覧ください。

本展示が、多くの方々に越前市中央図書館を知っていただく機会となり、これからの図書館により一層の期待をお寄せいただければ幸いです。今後も、先人が守り、発展させてきたサービスと蔵書をしっかりと継承しながら、情報通信・デジタル技術の発展も見据え、“進化し続ける図書館”として市民の皆様の期待に応えられるよう、鋭意努力してまいります。

越前市立図書館館
館長 中谷 光

町立武生図書館時代



1 町立武生図書館 棟札

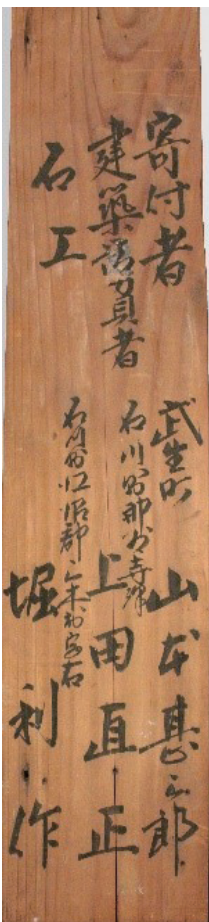
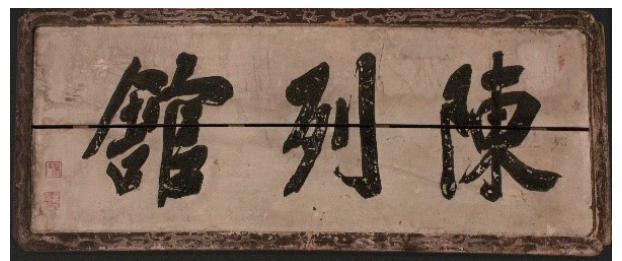
大正 12 年 (1923)
77.0 cm × 16.5 cm

建物の棟上の際に、後世に伝えるため建造の年月日や施主・建築業者などを板に記していたもので、「寄付者 武生町 山本甚三郎、建築請負者 石川県那谷寺駅 上田直正、石工 石川県江沼郡三木村字右 堀利作」、裏面には「昭和45年9月 解体」と書かれている。

2 扁額 「陳列館」

大正 12 年 (1923)
46.3 cm × 122.3 cm

大正13年に町立図書館内で撮影された写真には、閲覧室一階入口上部に掲げられている。当時、郷土資料などの展示などをおこなっていたのであろうか。詳細は、記録が残っていないため不明である。



3 特殊文庫 本館前身文庫

大正 12 年 (1923)
76 cm × 24 cm × 30 cm

府中本多家の藩校であった立教館で使われていた漢籍、谷口安定が寄贈した漢籍、進修図書館時代の文庫や目録など、町立図書館になる以前に使われていた資料が収められ、大切に保管されていた。



4 貸出文庫

昭和 16 年以降 (1941)
31 cm × 24 cm × 24 cm

貸出文庫は、昭和 16 年から始まった。武生市内の各種団体（青年団・婦人会・町内の同好会・会社・事業所など）に貸出されていた。貸出冊数は 1 回 25 冊以内で、期間は 1 ヶ月となっており、昭和 33 年 (1958) には 63 グループが利用した記録がある。



5 紙型『魁本大字類苑』

明治 22 年頃 (1889)

活版印刷するときに使われた、紙製の鋳型。組版などの原型に特殊な紙を当て、圧力と熱を加えて作られたもの。初代進修小学校長・谷口安定がこの辞書を出版した時は、東京駒場農林学校の教授をしていた。



6 蔵書印

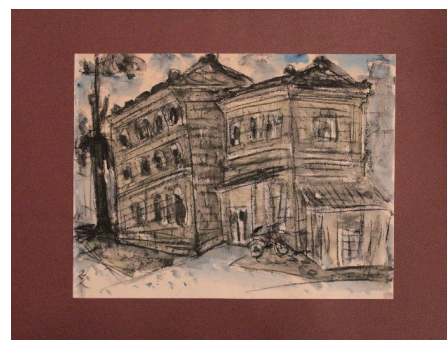
明治 42 年～昭和 40 年頃 (1909 ~ 1965)

図書館で使用されていた蔵書印。「進修図書館之印」、「武生市立武生図書館」、「武生町立武生図書館長」などがある。

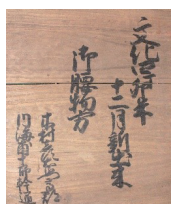
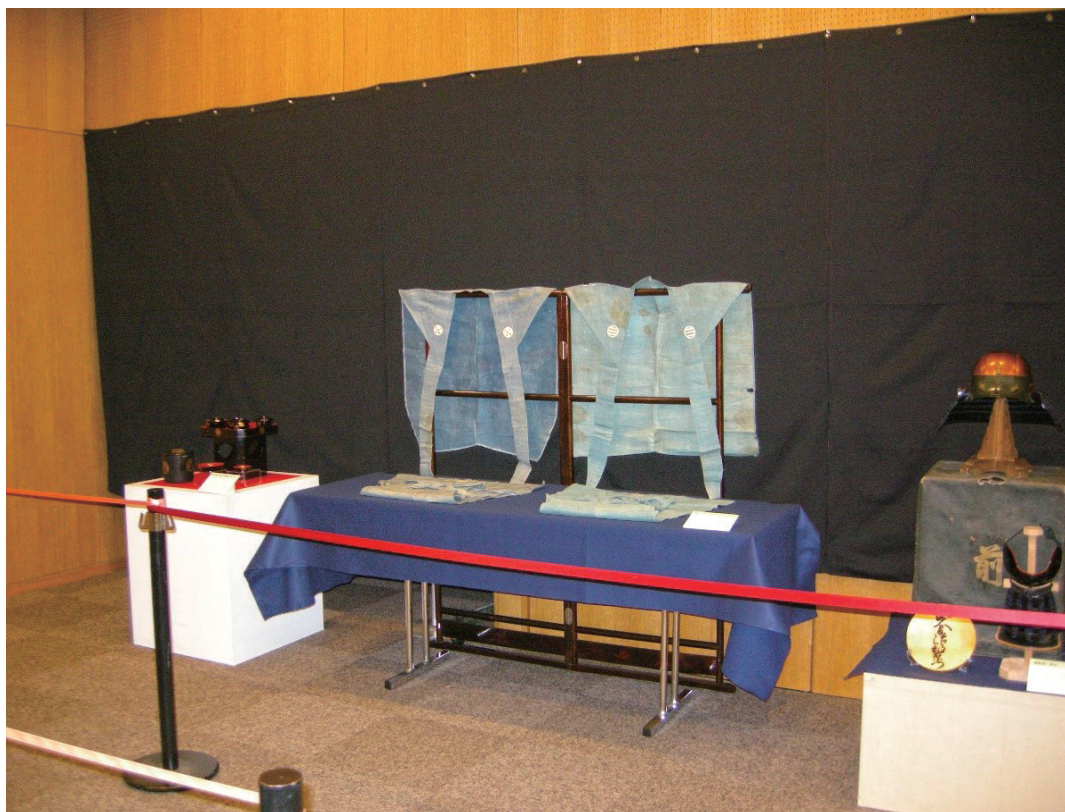
7 「絵画 無題」

昭和 40 年頃 (1965)
瀧石人 / 画

石造りの町立図書館を描いた絵画。冊子「図書館たけふ」No.1 の表紙を飾っている。瀧石人は、神門精一郎氏のペンネームで、越前和紙に関する著書などがある。



佐久間家文書・什器



8 紋入長持 (市指定文化財)

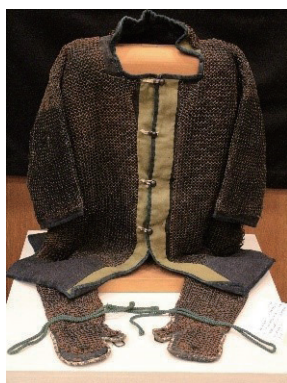
文化4年(1807)
66.5 cm × 137.0 cm × 59.5 cm



長持の内側底に「文化四丁卯年 十二月新出来 御腰物方木村彦右衛門高郡 内海甫十郎幹通」と墨書されている。木村彦右衛門と内海甫十郎は本多家の家臣。腰物方とは、刀・脇差などの手入れや保管など、刀剣に関わる一切のことを掌る役職であった。

9 鎖帷子 (市指定文化財)

江戸時代

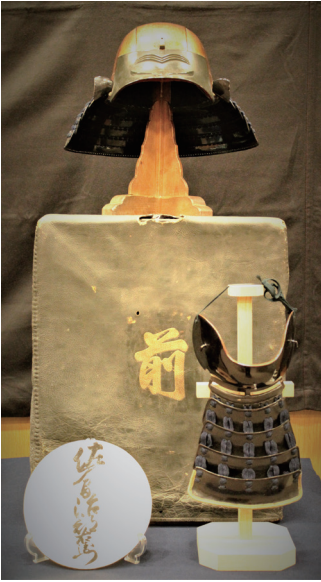


佐久間家伝来の鎖帷子。護身用のために細かい鎖を編んでつくられた着籠みの服。表面の南蛮鎖には、漆が塗られている。江戸時代末期、軽易な武装には鎖帷子が愛好された。

10 頭形兜・前立 (市指定文化財)

江戸時代前期

佐久間家伝来の兜と前立。頭形兜は、上板、2枚の脇板、腰巻板、正面の板の計5枚の板を矧ぎ合わせてできている。当時、より洗練された兜としてもっとも流行した。前立は、金の丸に佐久間治部右衛門と書かれている。兜、頬当、前立は揃いではない。



11 紋入膳・紋入仏前椀 (市指定文化財)

江戸時代

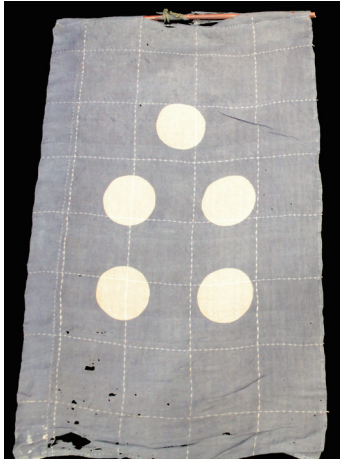
府中本多家の家紋である立葵が入った漆塗り三方膳と仏前椀。漆塗り蓋付椀が5椀、漆塗り小皿が2皿あり、仏事の時に使われたものと思われる。



12 陣笠・軍扇・采配

江戸時代

陣笠には、佐久間家の家紋、丸に三つ引がある。
軍扇は、武将が陣中での指揮に用いたもの。地紙には漆が塗られており、中骨を包んだ両面張り、表は黒地に赤の日の丸、裏は黒地に金の日の丸となっている。
采配は、合戦の際に大将やそれに近い武将が持ち、戦の指揮を執る時に用いたもの。紙や布などで房を作って木や竹の柄に付けた。



13 旗指物・蓑肌

江戸時代

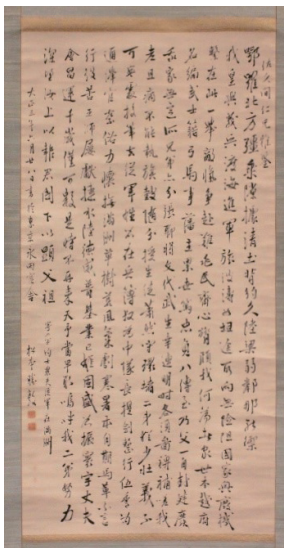
木綿地に白丸が5つは、佐久間家の旗指物。

蓑肌は、刀の鞘に被せる革製漆塗りのカバーで、佐久間家の紋が入っている。乗馬雨天の際などに使用した。

14 袴

江戸時代

本多家、佐久間家伝来の袴。袴は、肩衣と袴の上下セットで、基本的に白羽二重の襦袢に下着とよばれる小袖、熨斗目と呼ばれる小袖を重ね麻袴を着用する。平常は半袴だが、式日には長袴を着用した。



15 松本源太郎筆 自作五言律

大正3年(1914)

紙表装

松本源太郎は、府中本多家家老である松本晩翠の息子で明治40年(1907)から学習院教授・女子部長を勤め、大正7年(1918)には宮中顧問官となった。源太郎の弟である均と士農夫が、満州に従軍している時に書かれた漢詩であろう。

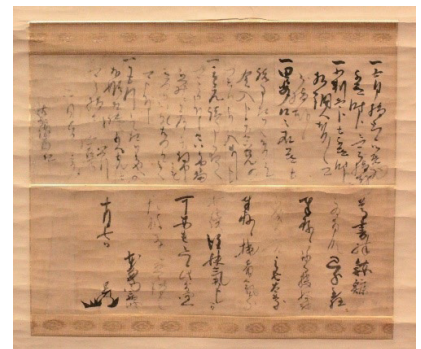
寄贈資料



16 本多富正・昌長書状

江戸時代初期

本多富正は、結城秀康から慶長6年（1601）に越前府中領3万9千石を与えられ、慶長20年（1615）大坂冬の陣に出陣し活躍する。この頃富正は伊豆守と呼ばれており、家臣の佐久間治部右衛門宛てに書いた書状である。本多昌長は、富正の子で本多家2代当主。

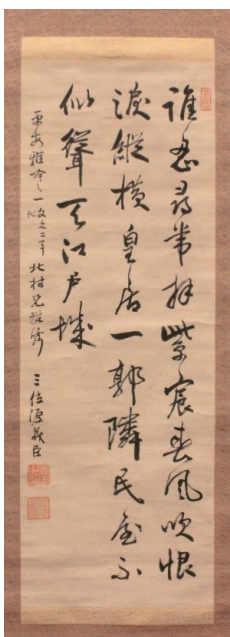


17 漢詩 関義臣直筆

文久2年（1862）

布表装

関義臣は、文久2年に江戸の昌平坂学問所に入寮し、翌3年には福井藩命によって国事探索方に任じられた。



18 鎌値上げ口上書木版 (市指定文化財)

〔利器工業協同組合文書〕

文久2年(1862)

26.5 cm × 34.9 cm

越前府中の鎌問屋から、全国の得意先に向けて鎌の価格を値上げすることを知らせるために出された口上書の版木。



19 「大日本沿海要疆全図」

〔関義臣文庫〕

安政元年(1854)

105.7 cm × 54.3 cm

工藤東平 / 編

津軽藩の地理学者、工藤東平が作成した日本地図。オホーツク海沿岸からカムチャツカ半島にいたる北方周辺を載せた図である。図の周囲には、経度が記されている。

20 「改正日本輿地路程全図」

〔関義臣文庫〕

安永4年(1775) / 序

67.0 cm × 99.0 cm

長久保赤水 / 作

長久保赤水(水戸藩儒学者)は、伊能忠敬の「大日本沿海輿地図」より40年以上前に、経緯線が書かれた地図を発刊し、広く普及した。全図木版、色刷りで隣接する国が4色で色分けされている。地図には、富士山や琵琶湖など各地の名所も描かれている。



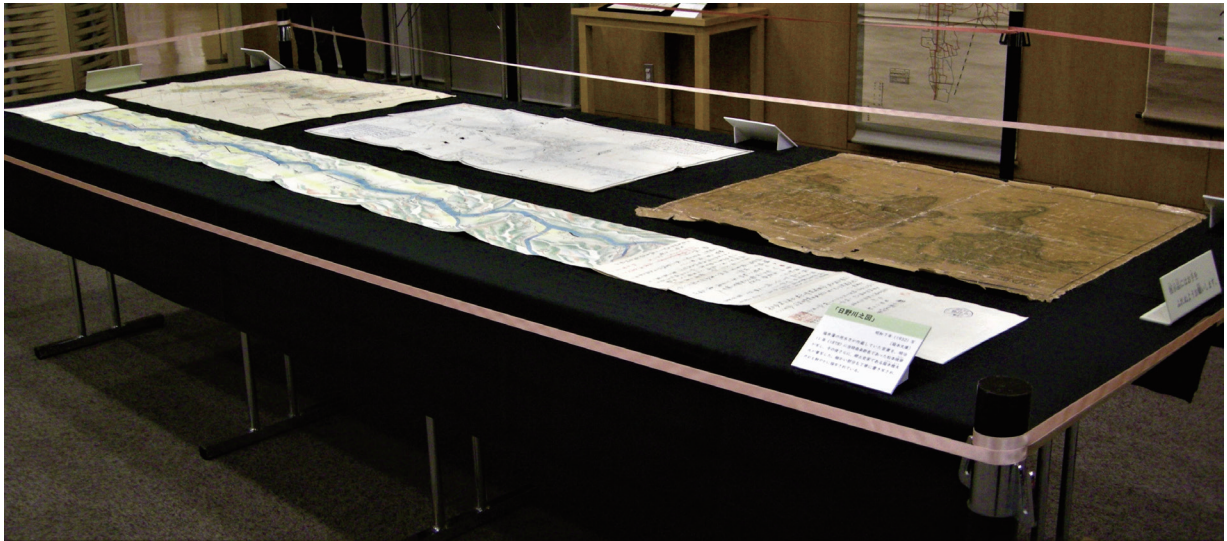
21 「World On Mercator's Projection」

明治時代頃

71 cm × 85 cm

W.&A.K. Johnston, London

メルカトル図法で描かれ、イギリスで発行された世界地図。ほとんどの大陸が詳細に描かれているが、南極は見られない。布製の裏紙の上に地図を張り付けたものである。



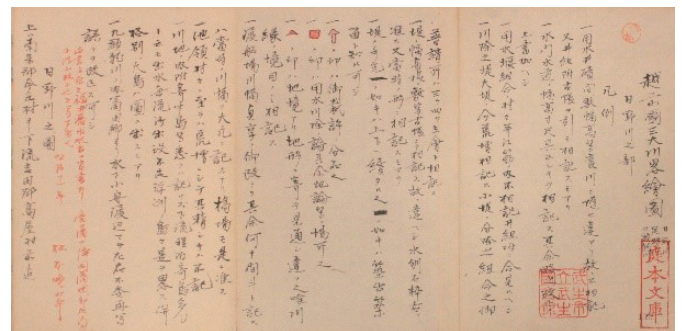
22 「日野川之図」

〔庭本文庫〕

24.6 cm × 561.0 cm

昭和7年（1932）写

福井藩の用水方が所蔵していた官書を、明治11年（1878）に当時南条郡長であった松本晩翠が写し、その後さらに、郷土史家である庭本雅夫氏が筆写した。細かい部分も丁寧に書き写され、色彩も鮮やかに描写されている。



23 「武生町市街宅地全図」

大正時代

235.0 cm× 83.5 cm

宮川源助 / 著・発行

大正期の武生の様子がわかる地図。武生尋常高等小学校の敷地には、まだ図書館は建設されていない。寺院や企業、停車場などが書かれており、個人宅は番号のみとなっている。

